古典人物絵画検索・画像分析のためのナビゲーションとオントロジ
―「歴史人物画像（古典キャラクター）データベース」の試み―

相田 満
国文学研究資料館アーカイブズ研究系
AIDA, Mitsuru
(National Inst. of Japanese Literature)

Navigation and ontology for seaching and anailzing the pictures of classical character in Japan
--Attempts in the Historical(Classical) Character Data base--

[概要]
限られた情報内容しか持たない画像データに対して、情報ナビゲーションをどのようにして構築するか。「歴史人物画像（古典キャラクター）データベース」の構築を通じて行ってきた試みと、今後のビジョンを述べる。

[Abs.]
Information included in the image data is very little. On the other hand, how should I construct the information navigation? I have done various attempts through the construction of "History character data base (classics character data base)". Here, I want to describe the vision in the report and the future.

1. はじめに

次々にデジタル化され、発信され続けるコンテンツは幾何級数的増加を見せている。しかも、近年は、ブログ、メールのような複雑な関係情報を持つ電子ファイルや、画像・動画のようにファイルの管理手法に配慮が必要なものを大量に抱え込む状況も一般的になってきており、様相はますます複雑になりつつある。しかも、こうした事態は、インターネット空間上だけでなく、個人のディスク環境においてもすでに切実な状態である所も少なくない。

本稿で紹介する「歴史人物画像（古典キャラクター）データベース」も、限られた情報内容しか持たない画像データをどのように扱い、情報ナビゲーションをどう構築していくかという点で同様の課題を抱えている。

しかも対象とするコンテンツが、日本の人口減少、教育の質的変化などの要因により、それを享受すべきユーザの減少ということも深刻な問題となりつつある古典に関わるものである。

この種のコンテンツに対応する情報ナビゲーションを構築するに際しては、検索者が既に知っているものを見つけることだけを目的とするだけでは、本当の意味での問題解決には至らないだろう。

確かに近年は、ウェブ上の文書や画像などを周期的に取得し、自動的にデータベース化するウェブクローラーのような技術の向上と普及ぶりには目を見張るものがある。そのため、多量のコンテンツをディスクや Web 空間内に置いておきさえすば、相応のパフォーマンスが期待できるデータベースを構築することも容易にはなってきた。

しかし一方で、そうした情報の価値や意義をきちんと把握・管理するのに役立つナビゲート情報は、まだまだ皆無に近い状況にあることもまた事実である。

そうした状況を少しでも改善するために、どのようにしたら一歩先を見据えた発想でコンテンツやデータベースの魅力を引き出せることができるようになるものか。本稿では、その視点に立って現状とビジョンを述べるものである。

〔資料1〕DB表示結果：天璋院

2. 歴史人物画像（古典キャラクター）データベース

「歴史人物画像（古典キャラクター）データベース」は、日本人の著録にかかる典籍群（国書という）の中から、人物の肖像を抜き出してデータベースとしたものである。

データベース開発の歴史は長い。画像データの収集が開始されたのは 2000 年度からのことで、まだ 200 ～ 300 万画素のデジタルカメラがようやく 10 万円以下の普及価格帯で市場に登場したころである。

データは国文学研究資料館の館蔵本から採集された。その多くは江戸期中後期の典籍で占められる。現時点のデータベースに搭載される収録作品数は 61 作品。採録人物は 3,163 名、延べ 4,739 件を公開している（http://base1.nijl.ac.jp/~rekijin/）。

〔資料2〕ZOOMA版 柿本人麻呂

画像ごとに個別の人物情報は掲載していないが、別に芳賀徹編『日本人名辞典』や正宗敦夫編『地下家伝』などを全件データベース化した古典人物情報データベース（芳賀人名データベース・地下家伝データベース）を構築しており、それらに載る人物と共通する人物については、異名・異称・血縁・事績ほか、さまざまな情報を見ることができるようになっている。

すでに DVD 版を3版、HTM シートに人名インデックスを列挙したホームページ版が3版、そして最新版となる 2006 年作成の DVD 版検索システムを移植した Web 検索版を最新版として、すでに7版を数えるに至っているが、そこに至るまでの改訂・開発状況は下記の通りである。

①[WEB版]2001年（H13）10月　396名、1,734件。 http://www.nijl.ac.jp/databases/db-room/syouzou/
　jpeg（サムネイル・拡大画像各 14,229 枚）。静的 HTML シートに五十音順の人名インデックスを表示。

②[DVD版]2002年（H12）3月　人物年表データベース(試行版)……2,013名、2,704件。
　2,013 名、2,704 件収載。芳賀人名データベース 44,098 件搭載。年号・太陽暦検索機能付。

③[WEB版]2005年(H17)3月　648名898件[9作品] http://base1.nijl.ac.jp/~rekijin/syouzou.html
　Dream Technologies 社（現 OmuniTrust 社）の ZOOMA 形式による高解像版。

④[DVD版]2006年（H18）3月　歴史人物画像データベース……2,225名。異称・異表記検索機能搭載。

⑤[WEB版]2006 年（H18）3 月　http://base1.nijl.ac.jp/~rekijin/ 2013 名、2,704 件収載。
　検索機能付（人名・書名・よみ・異表記・異称）。データ登録機能開発。InfoLib にて運用。

⑥[DVD 版]2007 年（H19）3 月　歴史人物画像データベース[桜版]…… 3,168 名、4,743 件。
　異体字検索機能。地下家伝データベース 6,657 件追加。61 作品。年号・太陽暦検索、同時代人関連検索・年表表示機能搭載。売価 3,000 円（発行：国文学研究資料館）。

⑦[WEB版]2008 年(H20)3 月　http://base1.nijl.ac.jp/~rekijin/ 3,168 名、4,743 件，61 作品。
　DVD 版収載のデータを移植、それまでの ZOOMA 形式による高解像度版とあわせての検索を可能とした。また、地下家伝・芳賀人名辞典データベースと、人物伝記解題データベースとを構築して有機的連動をはかる。また、データ中にユリウス通日と太陽暦に基づく暦日情報を埋め込こみ、人間文化研究機構の資源共有化データベースに適合させた。

2008年11月の時点では、国文学研究資料のデータベースメニューからは、⑤に掲げる約650名を一覧に示すバージョンのものしか表示されていないが、それでも2007年度の年間利用数統計では、国文学論文目録データベース(883,790件)・新奈良絵本データベース(867,053件)に次ぐ556,080件の利用があり、3番目に利用の多いコンテンツとなっている。(なお、未公開の⑦のWEB版も月間1,000以上のアクセス、250人以上の利用者数を得るまでになっている。)

3. 高アクセスの理由と今後の課題

このデータベースがなぜ高アクセスを得るに至ったかについて考えてみたい。

まず、そもそも歴史人物が図鑑のように一覧・比較できるものは、書物にも類例がないことが挙げられよう。加えて、本データベースの検索結果が HTML シートとなっており、歴史人物情報について Google 等で検索を行うと、たいていの検索結果に本データベースの検索結果もヒットしており、こうしたことも本データベースへのアクセス頻度を高めることに寄与しているものと思われる。

〔資料3〕同時代人検索機能（DVD版）

また、国文学研究資料館では、2008 年度からは館蔵和古書画像データベース(試行版) 5,600 件が公開されているが、これらの既存コンテンツに対して再解釈を行うことにより、古典籍にふれる機会を歴史人物画像(古典キャラクター)による情報ナビゲーションにより果たしていると意義づけることもできよう。

そして、今後公開されることになる第 7 版の検索機能付き WEB 版では、第 6 版の DVD 版までに作り込まれてきた暦日情報、異体字・異称同一視、同時代人関連検索などの検索機能と基盤データの諸要素を取り込み、新たなデータベースとして独立させ、画像・人物情報・伝記資料解題データベースの 3 つのデータベースが連携して運用できるように設計されている。(内、同時代人関連検索機能については、人間文化研究機構の時空間システムと併用すれば同時代検索も可能になる。)

しかし、皮肉なことに、本データベースは、今後さらにデータを累加する過程で、以下の問題の克服も喫緊の課題となりつつある。すなわち、「①人物同定の問題」「②画像データ管理の問題」「③見出し表記の問題」の克服で、いずれも、データが増えるに従って、いかに瑕疵のないデータベースを作り上げるかという情報管理の問題に起因するものである。

さらに深刻な問題は、今の日本人の生活が、ずいぶんと古典や伝統と縁遠いものになっているため、採りあげられた人物群は見慣れないものも相当数に上ってしまうことである。つまり、データが増加すればするほど未知の人物・キャラクターはますます増加することになるのである。

この問題はかなり深刻である。未知のデータついては、ユーザはアクセスの方途がないため、いつまで経っても目にふれることもなく、ディスクの中で眠ってしまう羽目になりかねない。

生起頻度の低い要素の合計が全体に対して無視できない割合を占めるという法則であるロングテイル(Long Tail)という術語は、すでに旧聞に属しつつあるが、古典的素養の減退が懸念される現代日本にあって、ほとんど無名に近い人物群像が知られることもなく、あたかも無縁墓地であるかのようにディスクの底に増殖し続けていることが、どこかで顕在化し、今後のデータベース拡張の論理に影響を及ぼさないという絶対的保証はない。

一方、ロングテイルの有効性を体現する Amazon.com では、各ユーザごとの購入・参照履歴から興味のありそうな情報を選択して表示するサービス(レコメンデーション)を実装しているが、学術情報の社会的還元を求められる機関においても、こうした教育的効果に配慮した情報発信やサービスは考慮されるべきであろう。

4. データベースの取材典拠群の特質―データベースの工夫と改良のために―

次に、データベースの運用と改良のために、何ができ、何をすればよいかを考えるために、まず歴史人物画像(古典キャラクター)データベースのコンテンツがどのような価値と性格を持つものであるかを確認する必要がある。それを使って研究することで、データベースがどのような効力を発揮することになるか、その価値を見極めることが重要となるからである。

最新版(⑥ DVD 版・⑦ WEB 版)に収載画像の典拠は次に示すとおり。いずれも国文学研究資料館の館蔵にかかるもので、そのほとんどが日本人を扱う。

〔資料4〕典拠作品一覧

岩倉具視公之実伝・英雄百人一首*・絵入赤穂四十七士詩伝・絵本威武貴山*・絵本堪忍記*・絵本古事談*・絵本忠経*・絵本徒然草・絵本武勇伝・絵本武蔵鐙*・絵本武者備考*・絵本倭比事*・円光大師御一代記・畸人百人一首*・狂歌百人一首*・近世報国百人一首・近世名婦百人撰・玉石雑誌*・義烈百人一首*・訓蒙皇国史略*・現今英名百首・源平盛衰記図会・好古事彙・弘法大師行状記・今人名誉百首・三国七高僧伝図会*・秀雅百人一首・集古十種*・神君長篠大合戦・神風遺談・新編歌俳百人撰*・粋興奇人伝*・先賢遺芳*・先哲像伝初輯*・前賢故実*・続英雄百人一首*・大日本国開闢由来記・徳川十五代記・徳川東国武勇伝・豊臣昇雲録・俳人百家撰・八幡太郎一代記・万家人名録・百人一首図絵*・武稽百人一首・武家百人一首*・武勇魁図会*・本朝孝子伝*・本朝百将伝*・本朝列仙伝*・源義経一代記・都絵馬鑑*・宮本武勇伝・明治英銘百詠撰・明治中興雲台図録・明治中興凌煙図録・役者三十六家選・利運談*・列女百人一首*・若鶴百人一首・和洋奇人伝*〔以上 61 作品(あいうえお順)〕

いずれも刊本で、成立年が明記されるものに限れば 1686 年(貞享 3)～ 1893 年(明治 23)成立のもので占められる。中には刊年などが不明のものもあるが、すべて江戸時代以降にかかりるもので、幅広く流布したものばかりである。

それゆえ、それぞれの典籍自体の価値は研究も十分になされてこなかったものが多く、辞書・解題類に名が見えぬものが大半を占める。

個々の作品だけを採り上げただけでは、研究上特別な価値を持つ資料であることを周知せしめることが難しい典籍や、研究の主流から外れて時代遅れと目されたりしている状況にある典籍群をあえてデータベース化することに、どのような意義があるのか。データベースを起案するに際しては、しばしばそのコンテンツとデータベースの意義が問われるものである。(同様の議論は、国文学研究資料館におけるデータベース事業が発案される毎に、幾度も議論が繰り返されてきたことでもあった。現在、館を代表するデータベースとなっている古典籍総合目録の前身「国書総目録」・国文学論文目録データベース・古典本文データベースのいずれも、同様の経緯を持つ)

データベースには、絵入りの叢伝や、いわゆる往来物の類に類別される百人一首の続撰書などから多くが取材されるが、生き様や特徴が類似する人物を集成したものを1タイトルの書物にまとめた作品が多く、その視点に立てば「(人物)叢伝」にも分類し得るものでもある。

叢伝とは、多くの書物から取材された人物の伝記、奇事、逸事を選び集めたものをいう。

日本人だけを扱う叢伝で中世以前のものは少なく、輩出が盛んになるのは近世以降である。また、本データベースでは、『前賢故実』『先哲遺芳』『先哲像伝』のような漢文によって伝が書かれた一部のものを除いて、そのほとんどが仮名書きの絵入り叢伝を典拠とする。

総じて、「仮名書き」と「絵入り」という2つの要素を併有する書物は、婦女子あるいは教養段階の初等にあるか、低年齢の者を読者に想定する作物であるとする認識が一般的である。比較的小型か、薄い本が多く、内容的にも文字だけで構成された人物叢伝よりも厳選・精選されたものが多いことことも、理解が容易であること、平易であることと等価に考えてよいだろう。

〔資料5〕若鶴百人一首
源氏巻名由来歌と源氏香を付載

しかし、そのことは編纂意識の上では、「この人物だけは採り上げたい、後代に伝えたい」といった規範意識・古典意識が強く働いた上で

のことで、これらの書物は総じて啓蒙性の高いものともいえる。

啓蒙的であることを、黄表紙などの草双紙と同じことと考えて、低俗なものであると受け止めることは大きな誤解である。その規範意識はきわめて伝統的・高踏的な所に根ざしていることには十分留意せねばならないだろう。

また、これらの典籍の中には、百人一首や人物列伝などに加えて、本編とは無関係な、源氏香や和歌、日本王代など、基礎教養として伝えられるべきさまざまな故実が欄外にふんだんに盛り込むことにより、小型の百科書の様相を呈していたものも少なくなくなかった。その内容の多くは、長い時間をかけて公家・武家たちの間で培われてきた儀礼・有職の世界に根ざすものである。

近世も後期になると、公家・武家に倣おうとする動きは、ついには一国の風俗となりゆくほどであったと嘆かれるほどであったが(西川如見『町人嚢』巻 2 冒頭)、そうした機運を押し上げるのに、こうした簡便な形で教養を伝える典籍、あるいはそれらが集成された刊のある大雑書の類の果たした役割は大きく、上層の文化・儀礼の意義と価値を庶民世界にまで伝達・共有させるのに重要な働きをしていたのである。

5. 古典意識・規範意識を指標とする

「歴史人物画像(古典キャラクター)データベース」に採り上げた典籍群に、強い規範意識に根ざして編まれたものが多い異ことは先述の通りである。そのような眼で選ばれた人物群は、

①多数の中から精選された結果が集約されたものである

と同時に、その教育的要素から、

②その時々で、人口に膾炙している

という特徴が明確に現れているということができるだろう。

かつて稿者は、この特徴に着目して、「歴史人物画像(古典キャラクター)データベース」に採録した典籍にどんな人物が多く扱われるかを分析すれば、前近代の特定の一時期における古典意識の様態(すなわち、どのような人物群を著名人と認識していたか)が判明するのではないかという調査を試みたことがあった[*1]。その概要は次の通りである。

〔資料6〕最新DVD版・WEB版収載61作品の典籍の特質(典籍の性質上、重複がある)

種別	時代不問型	時代限定型	百人一首型	女性限定型
書名例	英雄百人一首 絵本威武貴山 絵本堪忍記 絵本古事談…他	近世名婦百人撰 万家人名録 絵入赤穂四十七士詩伝 徳川十五代記…他	英雄百人一首 百人一首図絵 若鶴百人一首 武家百人一首…他	近世名婦百人撰 列女百人一首
件数	31 ／ 61	27 ／ 61	19 ／ 61	2 ／ 61
比率	50.8 %	44.2 %	31.1 %	3.2 %

まず、調査にあたっては、〔資料 6 〕に類別した収載作品中の、女性だけを集めたものや収録人物の時代が限定されている作品のような、収載傾向に偏りがあるもの対象から除外した。複数種の図様を持つ百人一首も一本だけを統計に加えることとした。その結果、さまざまな時代から取材された「時代不問型」の絵入叢伝を採り上げることとして、31 作品、延べ 1,748 名を分析対象として出現頻度を採ったのである。

上位 30 位以内に入った人物と、調査対象作品の内訳は、〔資料 7 〕の左側に示すとおりである。

この評価法で上位に挙がった人物群に共通することは、多くの物語伝承も併有しているだけでなく、信仰の対象となるほどの強烈な個性を放っていることである。たとえば、1 位の菅原道真は天神信仰、2 位の聖徳太子は太子信仰、4 位の源義家は八幡信仰と関わる。また、3 位の曾我時致は曾我兄弟の兄五郎の方で、若くして非業の死を遂げた曽我兄弟への同情が、やがて鎮魂伝説をともなう信仰に変わり、説経の題材として室町期以降、正月に決まって扱われるほか、歌舞伎においても「吉例」としての「曽我物」が正月公演の祝儀物として定番化するに至っている。こうした個性が魅力となり、その時々の人々の好尚にかなうように、再解釈が繰

り返されてきた。

〔資料 7 〕右側は、左側の結果に対して、勝俣隆氏が御伽草子(室町物語・中世小説)に登場する人物の出現回数を重ねた結果[2]である(『お伽草子事典』[3] の索引に採られた人物の登場回数が調査されてある)。

調査の結果、①上位 30 位中のうち、ほぼ半数の 16 人が御伽草子の中に、主人公または準主人公として登場することがわった。また、②御伽草子中の主人公(含準主人公)としての作品数の多さもこれに比例することも判明している。

さらに、日本の紙幣の絵柄に使用された人物の出現頻度[4]をみると次のようになる。

1位　聖徳太子[7回]
2位　菅原道真・和気清麻呂[6回]
4位　武内宿禰[5回]
5位　藤原鎌足[4回]
6位　神功皇后[3回]

菅原道真や聖徳太子が上位に挙がり、お伽草子では上位に名の挙がねことのない武内宿禰と藤原鎌足が同じ順序関係で現れている。これらを考えあわせると、絵に描かれた人物の登場頻度が、日本人の心性を反映した伝統的価値観を反映したものであることが了解されよう。「歴史人物画像(古典キャラクター)データベース」は、その意味で日本文化の基層を読み解くツールとなりえているといえるのである。

〔資料7〕時代不問型の典籍中に現れる人物群

6. 関連情報の提示

画像データベースとは言い条、現在の検索インターフェイスは検索者が画像の像主の名前を入力することによって、目的とする画像に辿り着く方法が基本である。しかし、この方法では、ユーザは目的とする人物以外の情報にアクセスすることはほとんどない。多様な検索要求を持つ多数の件要求に応えることは出来ても、個々人の興味を喚起することにより、検索機会を増やすことにはつながらない。

アイウエオ順に、人物示すメニュー型のインターフェイスは、全体が通覧できる点ではデータをブラウジングする気分にさせてくれてはいる。しかし、一覧可能なデータの数には限界がある。かりに未搭載の人物・画像を総て載せた場合には、 5000 人以上のデータが予想される。その際には、インターフェイスの使い勝手が良好なものか、不安は残る。

そこで、2つの方法を整えることにした。

一つは、別のデータベースからもアクセスを可能とすることによって横断検索を実現することで、データへのアクセス機会を増やすことである。

もう一つは、さまざまな視点による切り口を用意し、ユーザに対して特定の主題の本に集められた人物・キャラクター達の情報をセットで提供する方法である。その切り口に相当する部分の実体がオントロジである。

いずれの方法にも共通することは、検索者のデータ検索要求に応えるだけでなく、作成者側からも主題毎に検索結果を整えて提示したり、あるいはその目的に応じた検索手法をあらかじめ用意しておくなど、関連す

る情報を一緒に提示することである。

前者の横断検索のための工夫については、複数のデータベース(伝記解題データベース、芳賀人名・地下家伝データベース)の連携によるナビゲーション機能の強化である。現在、この3者のデータベースと「歴史人物画像(古典キャラクター)データベース」間には、同一人物ついては相互参照のためのリンクが貼られている(伝記解題データベースは作業中)。データ量の増加に課題を残すが、それについては、次に述べる人物オントロジの構築と平行して進めることが有効だろう。

リンク先の芳賀人名・地下家伝データベースでは、データ中にユリウス通日と太陽暦による暦日情報を持つ。これは、人間文化研究機構資源共有化プロジェクトにおける横断検索や、時空間検索システムに使用される暦日データベースの祖型になったものである。さらに、別に進めている『古事類苑データベース』(現在、天部・歳時部・地部1・2を公開中)についても時空間情報を埋め込む開発を進めており、実現のあかつきには、さらなるパフォーマンスが期待できよう。

後者の、さまざまな視点による切り口を用意する方法とは、具体的には、歴史人物・古典キャラクター群を、ある観点でまとめて、そのデータセットを別メニューとして整える方法である。その切り口に使用するオントロジに特色的なことは、古典的学問知の文脈に則ったオントロジを構築して運用することである。

具体的なオントロジでは、たとえば、

A.身分・官職・職業順、あるいは特定の人物集団のオントロジ

B.典拠となった書物の特性に着目したキャラクタオントロジ

などは、現在のシステムでも運用可能である。

A については、天皇・院などの大臣など、異同の少ないものについては、一覧順にすることにより、当該の人物を特定できると同時に、その特性によって、一般ユーザが未知の人物についてもナビゲーションが行えるというメリットがある。特定の人物集団では、たとえば、三十六歌仙や、ある撰集の作者集団など、さまざまなメニューが考えられる。特に、 NHK 大河ドラマに因む人物群像などは、過去にも突出したアクセス数を誇った実績を持ち、簡単なバーチャル博物館を構築することができよう。

B は、WEB 版データベースの「画像資料名」項目の検索機能を利用する。取材元になった絵本の題名に付される、「粋興 畸人伝・本朝 孝子 伝・義 烈 百人一首・武 勇 魁 絵伝」などの、集められた人物を端的に表現する評語が書名に付されている。たとえば、「女」「孝子」の語に着目すれば、データ中から、女性や親孝行な人物だけのデータを複数の典籍から抽出できる。これらの書は、黄表紙のような小説本のように凝った言語遊戯が題名に施されることはなく、「孝子伝」や「論語」「蒙求」「百人一首」など、古典的作品の権威を借りつつ、その内容が端的に分かるような意匠を頭書に付すという命名を行うことが少なくない。そうした類型的書名の特徴を利用しての検索法である。

中には、「めで度(たき)歌或は徳ある人または貧しくとも雅に富たる人(秀雅百人一首)」など、現代人には意味の分かりづらいものもあるが、そのようなものについては、あらかじめ検索結果やパターンを例示しておくとよいだろう。この手法は、取材典拠が増えれば増えるほど、より充実した検索が期待できよう。

さらに実験的かつ発展的性格をもつものとして、

C.「観相(人相)」に着目した画像ナビゲーション

も構想したい。

人の面相を判断するということは、実作者の立場、すなわち面相を描く者にも何らかの規範性があったのではないかということに想像が及ぶのは当然だろう。逆もまた然りである。事実、古来、古典的肖像画については、「凡(およそ)写真は先づ人相をしることを要とす」(『画法小識』(湖上蓑笠翁著,1836 [天保 7]刊)人物部画像の項)、あるいは「凡そ像を写すには須らく相法に通暁すべし」(陶宗羲『輟耕録』巻 11 冒頭,明末清初)

といわれるように、「観相(人相)」と不可分であった。

「歴人物画像(古典キャラクター)データベース」に採られている画像は、大首絵に象徴される役者絵や美

〔資料8〕『絵本武者備考』より

人画とは異なり、土佐派の流れを彷彿させるような和画が多く、このような観相を念頭に置く肖像が多く含まれると考えられる。観相に関する実践的資料は古来より日本・中国・台湾に多く流布していながら、これが研究の俎上に上ることはこれまでなかったことであったが、本データベースを、こうした実践的資料に応用せしめることも、興味を引く実験といえよう。(特にこの傾向は男性肖像に顕著である。)

たとえば、『絵本武者備考』(寛延 2 年[1749]刊、折江:撰、西川祐信:画)より取材した騎馬武者像は、京都国立博物館所蔵の上部に足利義詮の花押を置く『騎馬武者像』[*5] を祖本とするものと考えられる。このほか、データベースに採り上げられた肖像には鎌倉期以後盛んになった似せ絵の流れを汲む絵柄が反映されてか、同一人を並べてみると共通する面影を持つものが多い。印刷技術の拙さにより、必ずしも上質の絵柄を伝えるものとは言い難いとはいえ、元来土佐家などの絵の家に秘蔵されていた、肖像の下絵・見本的性格を持つ粉本には及ばないにしても、手本としての役割も、これらの絵本はある程度は担っていたのかもしれない。

なお、これをめぐっては、敗残の異様な武者像に対して足利義詮が花押をわざわざ押すということ等から疑義が投げかけられ、近年は足利尊氏を否定する意見が優勢になっているものであるものの、浮世絵の源流に位置するともいえる西川祐信のこの絵はこれまで研究者が指摘してこなかったものであったことからも、いかにこの種の典籍の研究に未開拓の分野が多いかを彷彿させるものとなっている。

〔資料9〕守屋本(現京博寄託)

7. おわりに

本データベースは画像データベースに取り組むという実験的試行から開始された事情もあったため、収録されるコンテンツがどのような価値を持つか十分なビジョン不在のまま事業が開始された経緯を持つものであった。しかしながら、システム設計・開発、データ構築・検証、コンテンツ研究の3者すべてを行った経験を振り返ると、それぞれに未開拓の主題が山積してることが痛感された。特に、本論後半でふれたように、デジタルコンテンツの構築と対象素材に対する研究の深まりとは車の両輪的存在であるといえるだけでなく、既存の学問の枠にとらわれない視点が、新たな可能性を開くものであったと、今更ながら感じられた次第である。

注:

*1 相田満,和漢古典学のオントロジ,第 9 章 和漢のキャラクタとデータベース,勉誠出版,2007,pp257-280

*2 勝俣隆,天人のキャラを通してみた『あめわかみこ(七夕)』の構造,国文学研究資料館基礎的研究「和刻本の研究」プロジェクト並びに総合的研究「古典形成の基盤としての中世資料の研究」プロジェクト合同日程開催プロジェクト研究発表会,於:国文学研究資料館,2008.7.23

*3 徳田和夫編,お伽草子事典,東京堂出版,2002

*4 「七十七銀行CYBER金融資料館・お金の中の人物」 http://www.77bank.co.jp/museum/okane/02.htm

*5 図版は黒板勝美「足利尊氏の画像について」史学雑誌 38-1,1920 によった。

※本論は、国文学研究資料館文学形成研究系「古典形成基盤としての中世資料の研究(代表・武井協三)」および日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(B)和漢古典学のオントロジモデルの応用:課題番号193000897・代表:相田満)による研究成果の一部である。